リテイク	BGV	ト書き	レティ	カティナ	音響指示
			監獄より響くオホ声Ⅱ　～頼れるイケ牝女騎士があなたのせいでロリっ娘拷問官に屈服するまで～		
					御子柴さんの演技ですが、NGカット等の処理が為されていないので、お手数おかけしますが、そちらの方もよろしくお願いします。
					全体的に、ブレスの音もカットして頂けると幸いです。
			■トラック1		
					トラック1、3、5、7は拷問室でのプレイになるので、少し声が響いたりしていると幸いです。

					カチャカチャ、と金属機器が鳴る音。（手術中みたいな雰囲気）鎖の鳴る音
	吐息		「ふんふふ～ん(鼻歌を5秒ぐらい)　ちょっと、針を持ってきてくれる？　お薬にたっぷり漬けたやつ。そ、これこれ」		
	吐息				
	吐息		「おっきなおっぱいの奥まで薬漬けにするには、これが無いとね。それでは、ちくっ、とします ねえー♪」		
				「ふうぅっ……！」	
					鎖がぎちちっ、と鳴る。
	吐息		「わぁ……♪　いやらしい乳首がムクムク立ってきたわぁ。ジンジン腫れて、とっても弱そう……　ふーっ(息を吹く)」		
				「ぅあああ……っ♥　あっ、うぅ……っ！　(歯を食いしばる)ふーっ……！　ふうーっ……！」	
			「あら、我慢できたの。偉いわね。女騎士って、みんな乳首が弱いのに。この間の子		

			なんて、爪先でびしっ、てしただけで……ふふふ……あはは！」		
			「あなたたち、覚えてる？　お猿さんみたいに、うほおーっ、て吠えて、鎖をがちゃんがちゃん！」		
					モブ拷問官の笑い声
			「カティナお姉様にも見せてあげましょうか？　また新しいのを連れてきて、目の前で……」		
					ガシャンッ、と鎖が鳴る。
				「私の前で、他の女の子の話なんてやめてくれないか……？　嫉妬、してしまうからね……」	
			「ああ……やっぱりいいわね、ロッツェンの騎士。心も体も頑丈で……奴隷にぴったり」		
			「ねえ、カティナお姉様。はやく誓ってくださいな。王国の騎士なんてやめて、奴隷		

			として、帝国の殿方に尽くす、と……」		
			微かなくちゅ音。		
				「んん……っ♥　悪いね……私には、忠義を尽くすべき国と、愛すべき国民たちが、いるのさ……」	
				「君たちのものには、なれないな……」	
			「かぁっこいい♥　流石はロッツェン騎士団の王子様、カティナ・ラグナート。噂通りの女騎士だわぁ……♥」		
			「このままずっと楽しみたいけれど……残念。帝国貴族の方々から、女騎士をもっとよこせって、注文が殺到しているのよ」		
					レティの台詞に被せてBGV喘ぎ声(小)
	喘ぎ声1		「この間の奴隷市でもね、元女騎士が一番売れたの。ほら、あなたたちロッツェンの騎士は、牝の分際で無駄に鍛えているでしょう？」		
	喘ぎ声1				

	喘ぎ声1		「どんなセックスにも使えて、どんな拷問にも耐えられて……もう大好評なの。大忙しで困っちゃうわぁ♥」		
	喘ぎ声1				
	喘ぎ声1		「だ、か、ら♥　早く屈服して頂けると、レティ嬉しいな♥」		
				「う……っ♥　はあ……っ♥　はあ……っ♥　そんな、ふざけた理由で、私たちを捕らえたのか……すでに、戦争は終わったというのに……」	
			「ふざけてないわぁ、大真面目よ。奴隷の出荷は帝国の立派な産業……ふふ、畜産、というやつね」		
			モブの笑い声。		
			「君たちは……(鎖が鳴る音)」		
			「さあ、今日も大切な商品をしっかり加工しないとね。ほら、もっと道具を持ってきて」		
				「ならば……せめて、私以外の人々は解放したまえっ！彼らは、ただの村人で……ふおおっ♥」	

					くちゅ音。喘ぎ声BGV(小)
	喘ぎ声1		「ダ～メ♪　あなたたち、人質をとらないとすぐに自決してしまうでしょう？」		
	喘ぎ声1				
	喘ぎ声1		「で、も……人質さえいればあら不思議♥　皆の為に拷問を受けて、ウホウホ泣き喚いて必死に耐えて……」		
			「最後には、無様に屈服宣言♥　奴隷にしてくれ～って、イキ潮吹きながら野太い声で懇願するの♥　本当、バカみたいよねぇw」		
					モブの笑い声
				「くぅふ……っ！　私はともかく、仲間への侮辱は……んん゛ああっ♥」	
				「や、やめないか……っ♥　乳首が、潰れてしまう……うぅっ♥　ふっ♥　んんんっ♥」	
			「潰れないわよお♥　ガチガチのマゾ乳首、もっとイジメてください～って、どんどん硬くなってるもの♥」		

			「よーし、針も追加しちゃいましょう♥」		
				「ぐああっ♥　う、うおっ♥　おおおっ！　おう……っ、おおお゛っ」	
			「でたでた♪　ロッツェン騎士団の得意技、うほうほダンス～♪　やればできるじゃない。偉いぞ、カティナお姉様♪」		
				「おおおうっ♥　うっ、ぐううっ！　は、挟む、なあ……っ、があっ♥　ぐああっ、千切れるぅ……」	
			「千切れないわよ、馬鹿なお姉様。おっきくてよわよわな乳首が、もっと大きく、もっと弱くなるだけ♪」		
				「ううっ♥　ダメだ……これ以上、弱く、なるわけには……っ♥」	
			「ムダムダ。お薬追加で～す♪」		
				「くあああああっ♥」	
			「くすくす……さあて、カティナお姉様の弱点を、もっとも		

			～っと、イジメやすくしないと」		
					大きめのくちゅ音。喘ぎ声BGV(中)
	喘ぎ声2		「引っ張って～　こねくり回して～　ぎゅーって潰して～　あははっ、ビクついてるビクついてるw」		
	喘ぎ声2				
	喘ぎ声2		「やっぱりぃ、ロッツェンの騎士と言えばぁ、この無様な鳴き声よねえ。らしくなってきたわよ、お姉様♥」		
	喘ぎ声2				
	喘ぎ声2		「ちょっと服と擦れるだけで、ビクビク悶えるよわよわ乳首……ふふ、牝奴隷に相応しいと思わない？」		
				「うっ……♥　むうぅ……♥　ま、まだまだ……弱くなんて……くうあァッ♥」	
			「あ、と、は♥　この大きなおっぱいも、もっとも一っと感じるようにしてあげないと、ね……♥」		

				「ふああっ♥　だ、だめだっ♥　そんなっ、大勢で……ッ♥　んあッ♥　お゛っ、おおっ♥　つ、強いッ♥　うぐっ、おおっ♥」	
	喘ぎ声２		「あなたたち女騎士って、みんなすごいお乳をしているわよねぇ？　食べている餌が一緒だから、バカみたいにお乳とお尻が大きくなるのかしら？」		
	喘ぎ声２				
	喘ぎ声２		「あそこで飼育すれば、どんな奴隷も、あなたたちみたいなイヤらしい肉付きに育つのかも……♥　今度実験してみようかなぁ」		
				「はぁーっ……♥　はぁーっ……♥　さ、させる、ものか……」	
			「？」		
				「たとえ今は、囚われていようと……どんな拷問を、受けようと……」	
				「私たちロッツェンの騎士は、いつか必ず立ち上がり……キミたち帝国人に、報	

				いを受けさせる。必ず、ね……」	
					3秒沈黙。
			「きゃー、こわーい！　強くてカッコいいカティナお姉様には、レティ、とても敵わないわぁ」		
			「だから……今の内にいーっぱい痛めつけて、いーっぱいイジめ抜いて……よわよわの雑魚にしておくね？」		
				「うぐおぉッ♥　おお゛……っ♥　ふ、ふといッ♥　いたッ、うひいいッ♥」	
			BGV絶句		
			「あははっ♥　まだまだいくよお？　おっぱいの奥の奥まで貫いてぇ……」		
				「ほおおおおッ♥」	
			「ぐりぐりこねくり回してえ……」		
				「んんあああああっ♥　やめッ♥　やめえええェッ」	

			「最後に思い切り引き抜けばあ」		
				「あ゛ッ！？　」	
			「はーい♪　拷問大好きマゾ乳首のかんせーい♥　カティナお姉様、まーた弱点が増えちゃったねー♥」		
				「あ、ああっ、う、うううう……ッ♥　うあッ♥」	
	絶句		「くす……ねーえ？　少し触れるだけでイっちゃいそうでしょう？　こんなんじゃ、もう服も着れないわよ？」		
			「いつか私と戦う時も、素っ裸で、おっぱいをぶるんぶるん揺らしながら、剣を振るの！　ふ、ふふふ！　馬鹿みたいねえお姉様♪」		
					モブの笑い声
				「ふ、ふふふ……」	
			「あら、なにが面白いの？　無様で惨めな自分の体に、笑うしかないのかしら？」		

				「いいや……ありがたいと、思ってね。私とて君のような少女を斬りたくはない。もう少し、弱くしてもらえると、手加減しやすくて助かるよ……」	
					しばしの沈黙
			「……あは♥　そーお。それじゃあ望み通り、その体全てを、弱っちい牝のものに変えてあげましょう。覚悟は……いいかしらぁ？」		
				「うううっ♥　むっ、むむむゥ……っ♥」	
					くちゅ音と、かちゃかちゃ、と器具が鳴る音
	喘ぎ声1		「ふんふんふ～ん(鼻歌)……あん、汁を飛ばさないで。あと……お尻ががら空きよぉ♥　あなた、たっぷり責めてあげて？それと、オマンコの方も……」		
			■2		

					ギイイ……と牢屋の扉が開く音。
					ザッザッ、と足音が近づく。どさっ、と近くにカティナが倒れる
				「ふー……っ♥　ふー……っ♥　う、うぅ……っ　ん、ふ……っ　ふー……っ　ふー……っ」	
				「ふふ……今日も、お互い、生き延びたようだね、少年……　キミの顔が見れて、嬉しいよ……ん、んん……！」	
リテイク				「う、うう……すまない……今日も、頼めるかい？　毎日、手間をかけるね……」	
リテイク					
リテイク					すりすり、と布でカティナの体を拭く音
リテイク					

リテイク	体を拭く音			「おっ、うぅ……っ　ふーっ……　ふーっ……　うっ、ううむっ♥　んふっ、ふうーっ……」	
リテイク	体を拭く音				
リテイク	体を拭く音			「う、うむ……今日も、随分、やられてしまったから……汗が垂れ流しで、気持ちが悪くてね……あ……っ♥」	
リテイク	体を拭く音				
リテイク	体を拭く音			「ありが、とう……そうやって、丁寧に、体を拭いてくれるだけで、救われるよ……おおっ♥」	
リテイク	体を拭く音				
リテイク	体を拭く音			「ふう゛う……っ　ぐっ、んんん……っ♥　んふっ、ふううっ　はあー……っ、はあー……っ」	
リテイク	体を拭く音				
リテ	体を拭く音			「い、痛くは、無い。続けてくれ……ぅおっ、おお……っ	

イク				んくっ、んん……っ　あぅふっ、んんん……っ」	
リテイク	体を拭く音				
リテイク	体を拭く音			「はっ、はあ……っ♥　ふうっ、ふうう……っ♥　そ、そうだ……ゆっくり、たのむ……うっ、くうう……っ♥」	
				「ふうーっ……　ふうーっ……」	
				「あ、ありがとう。かなり、楽になったよ……これで、明日からも、奴らの拷問に、耐えられそうだ……」	
				「……ふう。そんなに暗い顔をするな。この鍛えられた体を見たまえ。どんなに責められたって、ビクともしないぞ」	
				「ほら、触ってみろ。お腹も背中も、硬いだろう？　ん……っ♥　凄い？　ふふ、騎士としては当然さ」	
				「厳しい鍛錬を積んだからな。キミたちを、ロッツェンの民を守るために。だが……」	

				「すまなかった、少年。キミの故郷を、大切な人たちを……帝国軍から、守れなかった」	
				「あの日、王宮が陥落して……散り散りになった私たちを、キミたちの村はかくまってくれた。その恩も返せず、私は……」	
				「……今は、そんなことを言っている場合ではないな。さあ、こっちに来るんだ、少年。今日も、はじめよう」	
					ぴったりと寄り添うカティナ
				「大丈夫じゃ、ないんだろう？　そんなに顔を真っ赤にして、荒い息を吐いて……とても、辛そうじゃないか……」	
				「分かっているさ。キミのせいでは無いことぐらい。……また、媚薬を飲まされたんだな？」	
				「恥ずかしがらなくていい。キミはなにも悪くないんだ。だから……どうか私を頼ってくれ」	

					カティナが一気に近寄り、少年を背後から抱きしめ、耳元に話しかける。
				「大丈夫、大丈夫だ。なにも心配しなくていい。ただ、私に、体を委ねてくれ……」	
				「んっくっ♥　はーっ♥　はーっ……♥　な、なんでもない……へっちゃらさ。ふう……ふう……んっ♥　さあ、はじめようか……♥」	
				「うっ……♥　や、やっぱり、熱いね……　そして、硬い……」	
					手コキ開始。汁が擦れる微かなくちゅ音を挿入して頂ければ
	手コキ			「ふーっ♥　ふーっ♥　んっ♥　くっ、うっ、うぅーー……♥」	
	手コキ				
	手コキ			「はあ……はあ……♥　どうだ……？　痛くは、無いか？　ちゃんと、気持ちいいかい……♥」	
	手コキ				

	手コキ			「ふう……　ふう……♥　はあ……♥　はあーっ……♥」	
	手コキ				
	手コキ			「力加減は、どうだい……？　ふー……ふー……んっ♥　あ、熱い、な……」	
	手コキ				
	手コキ			「んぁ……っ♥　くうっ♥　す、すまない……っ♥　あまり、動かないで、もらえると、助かる……っ♥」	
	手コキ				
	手コキ			「はあ、はあ……♥　うん……っ♥　ふふ……気持ちいいかい……？　それなら、いいんだ……♥」	
	手コキ				
	手コキ			「んっ……♥　ふぅーっ……♥　ふうーっ……♥　ふ、ふふ……我慢しているのかい、少年♥」	
	手コキ				
	手コキ			「汚い、なんて……うふっ♥　そんなこと、気にするな……♥　遠慮なく、出せばいいんだ……♥　」	
	手コキ				
	手コキ			「ふー……っ(耳に息を吹く)　さあ、力を抜いて……♥　はやく、楽になってしまえ……♥」	
	手コキ				

	手コキ			「はーっ♥　はーっ♥　ほら……♥　ほ、ら……♥　(頬にキスをする音を5秒ぐらい)　んっ、くうう……っ♥」	
					射精音
				「はーっ……♥　はーっ……♥　いつもながら……すごい、臭いだな……っ♥　はっ♥　ああ、うううう……っ♥」	
				「す、すまない……んふっ♥　か、体が、擦れて、私も……気持ち良く、なってしまってね……♥」	
				「と、とにかく……落ち着いたのなら、よかった……♥　さあ、夜も遅い……今度こそ、眠ると……」	
リテイク				「しょ、少年？　まだ、治まらないのか？　そんな……媚薬の効果が、そこまで……」	
				「ふーっ……♥　ふーっ……♥　よし、わかった……キミが落ち着くまで、付き合うか、ら……うぅっ♥」	
				「はぁーっ♥　はぁーっ♥　す、すまない……少しだけ、疲	

				れが……ふう……ふう……よし……さ、はじめるぞ……」	
					手コキ再開
	手コキ			「ん……っ♥　はあ……っ♥　はあ……っ♥　あっ♥　ああっ♥　ふっ、ひいい……っ♥」	
	手コキ				
	手コキ			「ふ、ふふ……私も、少し媚薬を飲まされていてね……なに、気にするな……大丈夫だ、から……ああ、うぅっ♥」	
	手コキ				
	手コキ			「くす……心配、してくれるのかい……？　ありがとう。でも、大丈夫だよ。私たち、ロッツェンの騎士は……ふう゛ぅっ♥」	
	手コキ中断			「ふーっ……♥　ふーっ……♥　私は、絶対に負けない……キミは、なにも心配せず……自分のことを、一番に考えるんだ……」	
	手コキ中断				
	手コキ中断			「ふふ……それにしても、こちらは、素直だね……♥　しっかりと硬く、熱くなって……んっふっ♥　ふう……っ♥　ふう……っ♥」	

				「んんっ♥　大丈夫だ……心配するなと……はう……っ♥　ん、んんぅ……っ♥　ううう……」	
	手コキ				
	手コキ			「ふーっ♥　ふーっ♥　んっ、う……っ♥　まだまだ、収まらないか……　大丈夫だ。いつまでも、付き合ってあげるからな……」	
	手コキ				
	手コキ			「うっ、ふうっ♥　ん、あぁ……っ♥　く、んんっ、ん……♥　あ、あ、お……」	
			■3		
					電気を流す音。
				「ふう゛ううっ！？　うッ、あああああ……っ！　ああ゛っ、ぐっ、あああああああ……っ！」	
					電気終了。
				「はあ゛ーっ……　はあ゛ーっ……」	
	絶句		「くす……どーお？　無駄に鍛えた筋肉が、ビリビリ痺れ		

			て堪らないでしょう？　あなたたちの為に開発した、最新式の拷問装置よお♥」		
				「ちょうどいい、マッサージだね……少し疲れていたから、助かるよ……」	
			「あらそう？　喜んでくれて嬉しいわぁ♥　もっと気持ち良くしてあ、げ、る♥」		
					電気。
				「ふうっぐ！　ん、んん……！　好きにいたぶるがいいさ……だが、少年には、何もするな……これ以上は、許さないぞ……」	
			「はいぃ？　なんの話かなぁ……レティ分っからないなぁ～～♥」		
	悲鳴1			電気。悲鳴1を5秒ほど流した後、電気終了	
				「う、あぁ……あ、ああ……」	
			「ほらほら～　もっとカッコよく口答えしてよぉ、お姉様ぁ。ちょっと痺れるだけでしょう？　情けないぞぉ～♥」		

					断続的に電気を流したり止めたりする。モブの笑い声。
				「ふぅっ、うっぎッ！？　おうゞっ、く、ふっ……むううゞっ」	
	悲鳴2		「あははっ！　見てよ、電気を流す度に、腹筋が、ぴくぴくっw　ぴくぴくっw　お、も、しろ～～w」		
					モブの笑い声
				「ひゅーっ……ひゅーっ……」	
			「な～に～？　そんなにおっぱいをぶるんぶるん揺らして。下品な誘惑は止めてくださる？　ていうか……（すんすん、と臭いを嗅ぐ）」		
			「くっさぁい♥　精液に塗れた、牝犬の匂いがするわぁ♥　汚くてばっちいから、も～っとお仕置きしちゃお♪」		
					電気、悲鳴2を5秒ほど

	絶句		「うふふ……体が焼けるみたいでしょう？　薄汚いその体、たっぷり消毒してあげますからねえー」		
					電気。悲鳴2を10秒ほど。 電気を止める。
				「あっ、ああ……ッ、う、うあぁ……」	
			「くす……い―い、お姉様？あなたも、あの子も、私たち帝国人の所有物なの。それをどう扱ったって、あなたに口答えする権利は無いのよ？」		
				「ふざ、けるな……少年には、手を出すなと、言ったはずだ……キミたちの望みは、私たち、女騎士の屈服のはず……彼は、関係無いだろう……」	
			「手を出すって……レティなにもしてないわよ？　あれは、ちょうどいいから飼っているだけ」		
				「ちょうど、いい……？」	

			「お姉様の、牝奴隷としての訓練。ご奉仕の、練習よ。昨日も、たっぷりとしていたでしょう？」		
				「む……っ」	
			「ただ服従するだけじゃない。心の底から殿方に寄り添って奉仕する……お姉様が牝奴隷の作法を覚える為に、あの子はちょうどいい練習台になるもの」		
リテイク				「な、なんと醜悪な……！キミはどこまで……うお゛おっ」	
					電気
			「お姉様だって楽しんでいたじゃない。マゾの乳首をビンビンにして、弱いおマンコを濡らして、さあ♥」		
リテイク				「ち、ちがう……！　苦しむ少年を見過ごせなかった、だけさ……ロッツェンの騎士として、ね……」	
			「あら、そうなの？　毎日毎日拷問されて、くたくたに疲		

			れているのに、お姉様も大変ねえ」		
				「ふん……キミたちの拷問など、鍛え抜かれた騎士である私には、なんの意味も……」	
			「そーだ♥　せっかくだから、お姉様が楽になるように、オチンポ扱きのテクニックを教えてあげましょう♥」		
リテイク				「な、なに……っ、ふぅあぁっ♥　んあぁっ♥　ふっ、うううぅっ……っ♥」	
リテイク					
リテイク			電気(弱)　喘ぎ声1		
リテイク					
リテイク				「あっ、あっ、ああ……っ♥　なんだ、これはぁ……♥　うふっ、おおおぉう……っ」	

	喘ぎ声1		「どーお？　ゾクゾクするでしょう？　出力を抑えれば、こんなことも出来るの♥　前に捕まえた女騎士なんて、あまりの快感に気が狂ってしまったのよ？」		
				「はっ、んんん……っ！　ふおっ、おおお……っ！　こ、こんなっ、ふっ、おおン……♥　んんん……っ♥」	
				「んふーっ……！　んふーっ……！　こ、この程度で……っ♥　負ける、ものかあ……っ♥」	
			「くす……流石はお姉様、カッコいいわあ。でも、それじゃあ殿方は興奮しないから……もっと無様に踊ってちょうだいな♥」		
				「んくうううッ♥　くっ、ふぅん……っ♥　ほっ、おおおぉ……♥　おっ、おおっ、おおおぉ……♥」	
			「あははっ！　ビチビチ悶えて、まるでお魚さんみたい♥　無様で惨めで、とっても素敵よ、お姉様♥」		

					モブ笑い声、電気(弱)を継続
	喘ぎ声1　電気(弱)		「ほら、もっと跳ねて♥　腰を振って♥　あははっ！　でたでた～ロッツェン騎士団の伝統芸能、くねくねダンスよぉ♥」		
	喘ぎ声1　電気(弱)				
	喘ぎ声1　電気(弱)		「くっさい汗といやらしいお汁で体中テカテカに光らせて、おっぱいとお尻を振って殿方を誘惑♥」		
	喘ぎ声1　電気(弱)				
	喘ぎ声1　電気(弱)		「恥を知らない女にしかできない、オチンポおねだり音頭♥　なっさけなくて、いやらしくて、もう最高よねえ♥」		
		最後の息を吸い込む箇所カットして頂けると		「おっふっ♥　おおっぐっ♥　だ、だめだ……っ、体がっ♥　勝手にィ……ふんうっ、あああ――っ♥」	
			「へーえ……こんなにエッチなダンスを、勝手に踊っちゃうんだぁ♥　殿方を誘うため		

			に生まれてきた、生粋の淫売なのね、お姉様は♥」		
				「ち、ちがうっ♥　ふおお゛っ♥　でんき……っ♥　でんきのっ、せいでぇ……っ♥　うっひっ♥　いい゛いぃ……っ♥」	
			「う、そ、つ、き♥　ほらほら、鍛えた体で見せつけるド迫力の淫乱ダンス、もっと見せてくださいな♥」		
				「はぁうっ♥　くあ……っ♥　んお゛おおうっ♥　や、やめ……っ♥　やめろっ♥　おぉうっ♥　くふううぅっ♥」	
	喘ぎ声２		「ふーりふり♥　ゆっさゆさ♥　お汁を飛ばしてオホオホ鳴かせて♥　こんがり焼いて、牝奴隷を仕上げましょうねぇ♥」		
				「おおっ♥　おおおおーーっ♥　あっ、あああ……っ　あううぅ……」	
			「あら、踊らせ過ぎたかしら？　反応しなくなっちゃった。それにしても、女騎士って皆この顔するわよね」		

			「白目を剥いて泡を噴く、失神絶頂アクメフェイス♥　産まれた時からこの顔していたのかもね？　あはは、想像すると笑えるわぁwww」		
					モブの笑い声
			「ほら、イってないで、起きてちょうだいお姉様。まだまだ腰を振れるでしょう？」		
			ビンタ音		
				「う、うう……っ、こ、これ以上は、もう……体が……ううッ、痺れて……動かなく、なる……」	
			「いいじゃない。縛られて、拷問されるだけの生活でしょう？　動く必要なんて無いわ。お姉様には、情けない悲鳴と、無様なアクメ顔だけ残っていればいいのよ♥」		
				「はううッ♥　はーっ、はーっ……！　たのむ……このままでは……」	
				「あの子を……少年の、世話ができなくなる、から……」	

			「……ふっ、あははっ！　あはははは！　そう！　そうなのね！　オチンポにぎにぎができなくなるから、もう電気はやめてほしいのね！　あはははは！」		
					モブの笑い声
リテイク				「う、ううう……」	
			「あー、面白い。牝奴隷として満点の回答ねぇ♥　でもね、お姉様？　体が動かなくなったって……オチンポ奉仕はできるのよ？」		
				「な、なん、だと……おおっ♥」	
			「レティがちゃぁんと教えてあげるわ♥　失神するまで電気を浴びせて、ビチビチ痙攣させた後に、ね……♥」		
				「なに……っ、ふううンっ♥　おおうっ♥　ふっ、うふぅんっ♥　うっ、ううううっ♥　」	
			「あはは！　今はせいぜい踊っておきなさい♥　それっ、		

			そおれっ♥　あはっ、あはははは！」		
				「おッ、おおうぅ……ッ♥　やめッ、やめてッ♥　はあ゛ッ♥　ん゛、ああッ♥　い、いふうッ♥　うううう……っ♥」	
				「ぐああっ♥　うっ、おおおぉーーっ♥　おう゛っ♥　くおっ♥　ふぅっ♥　うううぅんっ♥」	
			■4		
			ガチャ、と牢の扉が開く		
				「うううう……あああ……っ」	
			ドサ、と倒れる音		
				「あ、あああ……　はあ……はあ……しょ、少年……うぅっ……！」	
				「はーっ……はーっ……　んっ、んん……」	
			ずりずり、と這いずる音。		
				「見苦しい姿を見せて、すまない……ふーっ……、ふー	

				っ……　体が、痺れて……言うことを聞かないんだ……全身に、電流を流されて……」	
				「ふふ……流石の私も、何度も意識を失ったよ……帝国人め……拷問の技術ばかり、発達している……」	
				「多くの騎士たちを、いたぶったと言っていた……私の仲間が、あんな目に遭ったかと思うと……くうッ……！」	
				「はあ、はあ……なぁに、大丈夫さ……辛いのは、私だけじゃないんだ。そうだろう……？」	
			少年の隣に座る。耳元で囁く。		
				「今日も、よく頑張ったな少年……媚薬で苦しむ中、よく耐え抜いた。キミは……とても、強い男だ……」	
				「ふふふ……照れるんじゃない。立派な人さ、キミは。それに比べて、私は……ん、んんん……っ♥」	

				「皆を守ることもできず、いいようにいたぶられるだけ……騎士として、恥ずかしい限りだ……」	
				「だから……だからせめて、キミの疼きを治めよう……それが、今私にできる、唯一の務めなのだから……」	
				「うっ、ふーっ、ふーっ……♥ すまない、少年……自分で、服を、脱いでくれないか？ 両腕が、痺れていてね……」	
				「……ああ、今日は、手が使えないんだ。 ……だから、その……はしたないとは、思わないでくれ……？」	
					フェラ開始
				「はむ……っ♥ ふっ♥ んっ♥ はっ、ふ……っ♥ むっ、ん……っ♥ ふーっ……♥ う、うう……っ♥」	
				「あ、あまり、動かないでくれ……その、くわえにくいから……♥ は、むっ♥ ふっ、んんっ♥ はっ、ふ……っ♥」	
				「ふっ♥ んっ、ふう……っ♥ ふーっ♥ んぐ……っ、んっ、	

				んっ、ふぶっ♥　んっ、んっ、んん……っ♥」	
				「ふう一っ♥　ふう一っ♥　汚く、なんて、ないさ……♥　手ですると、変わらないよ……♥」	
				「ん……舌も、使った方が、いいかな……？　は、ん……っ♥　あむ……んっ、ちゅ……っ♥　むっ♥　はん、ちゅ……っ♥」	
				「ん……むあっ♥　はあっ、はあ……っ♥　大きい、ね……♥　口から、こぼれてしまう、よ……♥」	
				「拙い技術で、すまない……その分、心を込めてするから、な……♥　はむっ♥　んっ、ふ……っ♥　はむ、ん……♥」	
				「ふ一っ……！　ふ一っ……！　んっ、んんっ♥　ふんっ、ふんっ♥　んっ、ほっ♥　あっ、おむっ♥　おぶっ♥　ん、ぐうぅ……っ♥」	
					射精音

				「う、ぷ……ふーっ……♥　ふーっ……♥　(ごくん、と飲み込む)　ん……なんとも言えない、味だね……♥」	
リテイク				「ふう……まだまだ、治まらないか。大丈夫だ。私が……ん……っ♥　少年……？」	
リテイク					
リテイク				「……気にするなと、言っているだろう？　私はなんとも思っていない。むしろ、こんなことしかできなくて、申し訳ないよ」	
リテイク					
リテイク					沈黙
リテイク					
リテイク				「……ずっと、騎士として生きてきた……王国の盾となり、安らぎを与えることが、	

				私の使命であり、生きがいだった……」	
リテイク					
リテイク				「今の私は、キミを守ることも出来ない。ならば……せめて、この体で癒したい。そうでもしないと、私は、私でいられない気がするんだよ」	
リテイク					
リテイク					少し沈黙
リテイク					
リテイク				「……ありがとう、少年。キミがいるから、私は頑張れる。だから……どんな責め苦にも、辱めにも耐え抜いて、必ず共に脱出しよう」	
リテイク					
リテ				「そのためにも……熱く火照る体を、鎮めるとしようか。	

イク				お互いに、しっかりと、休めるように……♥」	
				「ふむっ♥　む、ん……っ♥　はっ、くっ、うむぅ……♥　ふっ、ちゅ……っ♥　ふ、ん……っ♥」	
				「おっ、ふうっ♥　むううう……っ♥　ふーっ♥　ふーっ♥　ふふ……なんだか、美味しくなってきたよ……♥」	
				「なに？　いやらしい、だと……？　ふぅん……♥　誇り高き騎士に向かって、よくも……お仕置き、だ……♥」	
				「ちゅっ、じゅるる……っ♥　じゅぽっ♥　ぐっ、ぽっ♥　ふぐ……っ、んっ、んっ、ふぶっ♥　んん……っ♥」	
リテイク				「どうだ……♥　とても、耐えられないだろう……♥　だしてしまって、いいんだ、ぞ……♥」	
				「はふっ……むっ♥　む、むぐっ♥　んおっ♥　ふむっ、むむっ、んっ♥　ふっ、くっ、おっ♥　んっ♥」	

				「むむ、ひぐっ♥　ふしゅっ♥　んんん……っ♥　ぐふっ♥　んじゅっ♥　んんっ♥　ふっ、むううぅ……っ♥」	
リテイク				「ん、んんん……っ♥　（ごくん、と飲み込む）ふふふ……まだまだ、元気じゃないか……♥　まったく、しょうがないな……♥」	
				「じゅるるっ♥　ぐっ♥　ふくっ♥　はぶっ♥　ふぐっ♥　ぶるるっ♥　じゅるっ、じゅるるぅっ♥　ふぐぐっ♥」	
					フェラ音と共にフェードアウト
			■5		
				ムチの音のみで5秒ほど。	
			「んぐううう……ッ！　うッ、ううう……」		
			「あらあらぁ？　まだ 20 回ほどしか打っていないわよぉ？　この間なんて、50 回打っても声をあげなかったのに……ふふっ♥　どんどん弱く		

			なってるわね、お、ね、え、さ、ま♥」		
					ムチの音
				「おお゛……っ　はあーっ……　はあーっ……」	
			「なに？　口をパクパクさせて。疲れて言葉が出てこないの？　それとも……オチンポのくわえすぎで、お口が痺れているのかしらぁ？」		
					モブの笑い声
			「随分と長くご奉仕していたわよねぇ？　レティも教えた甲斐があるわぁ♥　少年オチンポ、そんなに美味しかったのぉ？」		
					3秒沈黙
			「ちょっと、お姉様？　まだ軽く打っただけでしてよ？　失神敗北には早すぎるで、しょっ！」		
					ムチの音
				「んっぐうッ！　はーっ、はあーっ……すまない、少し眠っ	

				ていたようだ……キミたちの責めが、あまりに退屈でね……」	
			「あらそう。でしたら、目が覚めるまで鞭打って差し上げましょうね。みぃんな、お姉様を叩きたくてウズウズしているのよ」		
					ここ以降、ムチと悲鳴2が続く
	悲鳴2		「あぁ……たまらないわぁ……レティ、鞭打ちだーいすき♥　知ってる？　奴隷ってね、鞭で打たれた時の音が、みぃんな違うのよ♥」		
	悲鳴2				
	悲鳴2		「鍛えられた女騎士であるほど、いい音が鳴るの。お姉様は、その中でも特上♥　最高クラスの奴隷になれるってこ、と……♥」		
				「むぐッ、うぅ……それはどうも。お褒めに預かり、光栄だよ……」	
			「ええ、たくさん褒めてあげましょう。長い鍛錬、ご苦労様でした♥　おかげさまで、こんなに楽しい拷問ができるんだもの♥」		

	悲鳴２				モブの笑い声
	悲鳴２				
	悲鳴２		「お姉様はぁ、レティにこの音を聞かせるために、体を必死に鍛えてくれたのよね？　お尻をムチムチに育ててくれたのよねえ？」		
	悲鳴２				
	悲鳴２		「あははっ、本当にご苦労様だわぁ♥　人生丸ごと使って、こんなに叩きごたえのあるマゾ肉をこさえてくださったのですから♥」		
	悲鳴２				
	悲鳴２		「安心してね、お姉様。大事に作り上げたムチムチの体……徹底的に使い尽くて、壊れるまで遊び尽くしてあげるから、ね♥」		
					一際強いムチの音
				「……ふうっぐッ！　んッ、んんん……」	
				鞭打ち終了	
				「ふーっ……　ふーっ……受けて、立とうじゃないか……壊せるものなら、壊してみるといい」	

				「私は……ロッツェンの騎士は、守るべき者がある限り、決して、負けない……」	
			「寝言はやめてくださるかしら。お目目は虚ろで頬もコケて……お姉様、もう壊れかけじゃない」		
				「んん……っ、なにを、馬鹿な……」	
			「昼は拷問でボロボロ、夜はご奉仕でクタクタ……たぁいへん♪　どこかの誰かのせいで、休む暇が無いわぁ♥　あっはははは！」		
					モブの笑い声
				「勘違い、しないで欲しいね……あの子がいるから、私は耐えられるんだ……頑張れるんだ……それが、騎士という……」	
			「う、そ。はじめの頃は、鞭も電気も全然効かなかったじゃない。それが今では、ちょっとイジめただけでウホウホ鳴いてしまって……」		
				「うっ……」	

			「自分でも分かっているでしょう？　だって……鞭を打たれただけで、こんなになってしまっているんだから♥」		
					くちゅ音
				「はあうッ♥　あッ、あああ……ッ♥」	
					くちゅ音　鎖が鳴る音。
	喘ぎ声1		「あは♪　ドロドロじゃないの、マゾ豚お姉様♥　痣が残るぐらいに叩かれているのに、随分と気持ち良かったみたいねえ♥」		
				「はぁっ……♥　はぁっ……♥　こ、これは……キミたちが、媚薬を飲ませるから……」	
			「だからといって鞭打ちで濡らすなんて、はしたないにも程があるでしょう。本当、どうしようもない淫乱なんだからぁ」		
				くちゅ音	
			はあぁ……カット	「ううっく……ッ♥　んんっ♥　はあぁ……っ♥」	

			「今日はここでオチンポを楽しむつもりぃ？　自分勝手に発情して、奴隷としてご奉仕する自覚があるのかしら。少し、お仕置きが必要かも、ねぇ……♥」		
				「む……な、なんだ……っ！　こらっ、離したまえっ！　ああッ……」	
	ジャラ、と鎖が鳴る音。		「それにしても長い足。鎖を巻くのも一苦労だわ。ほら、引っ張ってちょうだい。ぐしょ濡れのお股を開かせるのよ♥」		
				「やっ、やめろ……っ！　くぅッ、んんん……ッ」	
					ギシッ、と鎖が鳴る。雫が垂れる音
				「はぁーッ……♥　はぁーッ……♥　ううっ」	
			「あは♥　這いつくばって、お尻だけ突き出して、無様ねぇ……♥　いつものように磔にするのもいいけれど……オマンコを叩くならこうよね♥」		
					くちっ、とくちゅ音

				「ふぅんっ♥　おッ♥　なッ、なんだっ♥　ふおおッ♥　なにを、して……っ♥　おおおッ♥」	
			「どーお？　オマンコ叩き専用の、特注の鞭よぉ♥　イボイボがいーっぱい並んで、とーっても気持ちがいいでしょう？」		
				「んふッ♥　ふーっ……♥　なっ、なんのっ、つもりだ……っ♥」	
			「ふふふ……感謝してくださいねぇ♥　いやらしいお姉様が、肉欲に任せてあの子をハメ潰してしまわないように……」		
			「優しいレティが、欲求不満のカラダを、たぁっぷりとイかせて差し上げますから……♥」		
リテイク				「（息をのむ）　やめろッ、やめッ、くお゛あああああああーーーーッ♥」	
					鞭の音。潮噴きの音。

				「お、おお゛お……」	
	絶句		「あはははは！　たったの一撃で潮を噴くなんて、弱すぎるわよ、お姉様ぁ♥」		
				「おお゛おおンッ♥　ふお゛……ッ♥　おおおぉ……♥　いッ、ふううぅ……♥　は、あ……ッ♥　あああ……ッ♥」	
			「もう、そんなザマであの子のオチンポを満足させられるのかしら？　ちゃんとご奉仕できるよう……特訓しないと、ねえ！」		
					鞭の音
				「ふぎゃあッ♥　あああ゛ッ♥　いぎ……ッ♥　お゛あああッ♥　あうッ、ふっぐうぅン♥　ひゃッ、ああンッ♥」	
			「あん♥　いやぁねえ。お姉様のくっさいオマンコ汁が頬にかかっちゃったわぁ♥　だらしなく漏らしていないで、もっと引き締めてくださいなぁ♥」		
				「ふおおおあッ♥　うっひッ♥　むああッ♥　ひゃあぁーーッ♥　おうッ、おッ♥　ほおおおおンッ♥」	

			「もおー♥　引き締めてって言ってるのにぃ♥　分厚い肉ビラをぷるぷるさせて、叩いてくださーいってレティを誘って……いけないオマンコなんだからっ♥」		
				「はああ゛ッ♥　ふお゛……ッ♥　誘ってないッ♥　ないィッ♥　もうやめッ♥　ふがッ♥　ぷあああああああッ♥」	
					潮噴き
			「ぷあああああwww　ぷあああ、ですってw　女騎士の新しい鳴き声を発見してしまったわぁ♥　図鑑に書いておかないとねえ」		
			モブの笑い声		
				「はあ゛……ッ♥　ああ゛ああ……っ♥　だ、だめだァ……そこは、もう……はう゛ッ♥　やめて、くれェ……」	
			「そこじゃないでしょう？　お、ま、ん、こ♥　ちゃんと言いなさい。いやらしくて、だらしがない、オマンコでしょっ♥」		

				「うひい゛ッ♥　あああ……ッ♥　ああうぅ……後生の願いだ……たの、むゥ……」	
			「あははっ♥　まだ反抗する元気が残ってるんだぁ……♥　じゃあ、も一っとイジめてあげないとねぇ♥」		
				「ううう……ッ♥」	
	喘ぎ声３		「上から思い切り叩き下ろすのとぉ……下からこうやって打ち上げるのっ♥　あははっ♥　どっちが効く？　ねーえ、どっちぃ？」		
				「あああ゛ッ♥　効くッ♥　どっちも効くからあ……ッ♥　やめッ、やめて、くれぇ……ッ♥」	
			「だーめ♥　どれが一番効くか、ちゃんと教えるまでやめてあげなーい♥」		
				「ふんッぎゃッ♥　ああ゛ッ♥　こわれる゛ッ♥　おお゛ッ♥　こわれるう゛ッ♥　ふん゛ッ♥　ふぐぐッ♥　ひい゛いーッ♥」	
			「みーぎ♥　ひだり♥　うーえ♥　しーた♥　あはは！　真っ赤		

			に腫れ上がってるから叩きやすーい♥」		
			「お乳もお尻もオマンコも大きいから、鞭の的にぴったりだわぁ♥　やっぱりお姉様は、レティの玩具になるために生まれてきたのよぉ♥」		
リテイク				「ん゛んんッ♥　ちがうッ、ちがうゥ……ッ♥　わたしはァッ、きし……ッ、んい゛いッ♥　ぎゃッ♥　あああああッ♥」	
			「あははっ♥　噴水みた～い♥　他の女騎士と一緒に帝都にでも飾ってあげましょうか？　いい名物になりそうよねえw」		
					モブの笑い声
			「並べて逆さ吊りにしてぇ、決まった時間にビシバシ鞭打って潮を噴かせたりしたら、面白いわよねぇ？　時計の鐘の代わりに、女騎士を鳴らすのよぉw」		
				「うぅ……ッ♥　うううぅ……ッ！　ふううぅ……っ！」	
			「あらァ？　唇なんて噛んでどうしたの？　騎士団のお友		

			達の顔でも思い出したのかしらぁ？」		
			「情けない姿を見せられないってえ？　気にしなくていいわよぉ♥　今はみぃんな奴隷になってるからw」		
				「ううッ！　んふッ！　ふーッ！　ふっぐッ！　ふっごおッ！　んんんーーーーッ♥」	
			「あははッ！　みてよこれw　ぶっさいくな顔で堪えてるわぁ♥　ほぅら♥　ほ～ら～♥　がんばれがんばれ～♥」		
					潮噴き
			「あっはっは！　ちょっとお姉様ぁ、ちゃんとオマンコも閉じなさいよぉ♥　声を抑えたって、イキ汁噴いたらしょうがないでしょうw」		
				「うッ、うううッ、うううぅーーッ……！　ふうぅーっ……！　(声も無く泣き叫ぶ)」	
			「情けない奴隷には～お尻ぺんぺんよぉ♥　んん～～♥　この叩き心地、最高よねえ♥　お肉がいっぱいに詰まって、それにぃ…ひゃんっ♥」		

					潮吹き
			「うそでしょぉ？　なんでお尻を叩いて潮を噴くのよ、マゾボディにも程があるわぁ。レティ、ちょっと引いちゃう」		
				「ふーッ……！　ふーッ……！　うッ、うううぅ……ううううう……（泣く）」	
			「あーあ、泣いちゃった。こんなになると興覚めね。あなたたち、後は好きにしていいわよ」		
				「ふーッ……　ふーッ……」	
			「それにしても……大変よねえ。 両腕は痺れて使えない。お口もへとへとで締まりが無い。唯一残ったオマンコは……」		
				「くほッ♥　おあああッ♥」	
			「あは♥　少し触れただけで、イってしまう程に敏感になっちゃったわね♥　こんな体で、まともなご奉仕ができるのかしらあ♥」		

				「はあー……ッ♥　まさ、か……はじめから……それが目的でッ、んんんッ♥」	
			「盾になれないなら、せめて体を捧げて役に立つ……それがロッツェンの騎士なのでしょう？」		
			「せいぜい、ここでしっかり奉仕してあげなさいな。この情けないオマンコが、オチンポに耐えられたら、ですけど……♥」		
リテイク				「う゛、うぅ……それでも、私は……んあ゛あッ♥　はッ！？　ま、まてッ♥　もうッ、おおッ♥　あッ♥　あッお゛おおッ♥」	
					モブの笑い声
リテイク				「ふおお゛ッ♥　やめろ……ッ、やめてくれェ……♥　はあ゛っ♥　これ以上はッ、ふう゛あああああああーーーーッ♥」	
					モブの笑い声、ムチ1でフェードアウト

			■6　セックス		
					扉の開く音。どさっ、と倒れる音。
					がさがさ、とカティナに駆け寄る音。
				「う、う゛うぅ……オマンコ、やめろ……っ♥　やめろぉ……んお゛ッ♥　ふうっ、うぅん……ッ♥」	
					ちょろちょろ、と失禁する音。
				「うううう……あ、え……？　しょう、ねん……まさか……はッ！」	
					がさっ、とカティナが飛び起きる音。
				「ふううう……ッ♥　あッ、う……ッ、ふーっ……♥　ふーっ……♥」	
				「……聞いて、いたかい？」	
リテイク				「は、はは……すまないね、少年。騎士として、耐え抜くと……そう、誓ったのに……	

				結局、私は……んんん……ッ♥」	
				「ち、ちがう……キミのせいじゃ、ない。逆、だよ。キミのおかげで、私はなんとか、頑張れて、いるんだ……」	
				「私一人だったら……とっくに負けていたかも、しれない……それほどまでに、奴らの拷問は、凄まじい……うっ、ううんッ♥」	
				「はーっ、はー……っ♥　す、すまない……辛いのは、私だけでは、無かったな……♥」	
リテイク				「隠さなくたって、いい……においで分かるさ……もう、限界なんだろう？　そんなに、大きくして……」	
				「ふーっ♥　ふーっ♥　そんな体で、よく頑張ったな……偉いぞ、少年。キミは、とても強い男の子だ……」	
				「もう、我慢しなくていいんだ。いつものように、私が……んっ♥」	

				「ま、また、大きくなったかな……？　媚薬を、増やされたのかい……？」	
				「ふぅーっ……♥　ふぅーっ……♥　もはや、口では治まらないな……よし。こっちに来てくれ、少年……」	
					真正面から抱き着く。
				「ん、んんん……♥　だい、じょうぶ……ふう……っ♥　心配、するな……うん？」	
				「はじめて、だとも。なに、問題無いさ。今までと、一緒……おっ♥　すぐに、楽にしてあげよう。さあ、力を抜いて……私に、任せて……」	
					対面座位で挿入
				「ふおおッ、んんほおおーーッ♥」	
				「お゛ッ♥　お゛おおッ……！？　かふっ、あ……ッ♥　そん、な……っ♥　もっ、おおッ♥」	

				「こんな……ッ♥　こんなにィ……ッ♥　ん゛おッ♥　ひィん゛ッ♥　あ゛っ、ふひゃあ゛ああああッ♥」	
				「う、動くなッ♥　いひッ♥　動かないで、少年ッ♥　と、止まって……っ♥　おねがッ、はあッ♥　ふううぅッ♥」	
				「んふーッ♥　んふーッ♥　かっ、ああっ、あ……っ♥　おおっ、ダメだァ……♥　気持ち、良すぎてぇ……♥」	
				「すっ、すまない……っ♥ 今、落ち着く、から……っ♥ だから、ふおおおッ♥　おッ♥ 大きく、しないでくれぇ……♥」	
				「は……ッ♥　はあーッ……♥ はあーッ……♥　よ、よし……！　い、いくぞ……う、ほおおッ……♥」	
				「んふうッ♥　うッ、んううう……ッ♥　くああッ♥　ふん゛んッ♥ あッ♥　あああうぅ……っ♥」	
				「どう、だい……ッ♥　ふお゛ッ、ひゃああ……ッ♥　ああ゛ッ、またァ……ッ♥　く、いッ♥ ひいいッ♥」	

				「ま、まだ、か……ッ♥　まだ……はあああッ♥　ううッ♥　ふか、いィ……ッ♥　ああっ、ふううぅ……ッ♥」	
				「あうぅッ♥　はううぅ……ッ♥　んッ、んん……ッ♥　くおう゛ッ♥　ふッ……おお゛おおんッ♥」	
					潮噴き
				「へぇーッ♥　へぇーッ♥　らい、じょうぶ、だぁ……♥　今うごく、うごくからァ……ふおッ……♥　ほッ、おおおッ♥」	
				「おう゛ッ♥　はあう゛ッ♥　はッ、はげしッ、すぎ……いいッ♥　しょうねんッ♥　しょう、んひい゛ッ♥」	
				「まッ、まってえッ♥　おねがッ、んあッ♥　だめだッ、はあッ♥　んあ゛ああッ♥　あッ、はあうぅッ♥」	
				「やめッ、やめてぇ……ッ♥　くうあッ、んあッ♥　おお゛……ッ♥　も、ムリ……むッ、ひいッ♥　いいッ♥　んッ、ぐうううぅッ♥」	

					射精　BGV（絶句）
リテイク				「ひゅーッ……♥　ひゅーッ……♥　ひどいじゃ、ないか……んふっ……♥　待ってくれと、言ったのに……」	
				声が少し遠のく	
				「ふうっ……♥　ふうっ……♥　しょう、ねん……？　どこへ、くっ……♥　どこに、行くんだい……まだ……満足して、いない筈だ……」	
				「あんなに、乱暴に、早く終わらせて……私を、少しでも長く、休ませるつもりかい……？」	
					少し沈黙
				「ふぅーっ……　まったく……」	
				がばっ、と背後から抱き着く。	
				「ありがとう、少年。そして……すまない。そんな風に、気を遣わせてしまうなんて……私は本当に情けないな。騎士、失格だ」	

				「うん。正直に言おう。私はもうボロボロだ。こうやってキミと交わるだけで……あまりの快感に、気を失いそうになる」	
				「でもね、だからこそ……してほしいんだ。キミの為じゃ、なくて。私の為に……」	
				「あっ、その……淫らな女だと、思わないでくれ？　そういうつもりでは、いや……」	
				「ふー……観念するよ、少年。キミとの交わりは、とても気持ちがよかった。今までの人生で味わったことの無い、快感だった……♥」	
				「だから、だから……して欲しいんだ。これから先、どんな苦痛や快楽を……この日のことを、キミのことを、いつだって思い出せるように」	
				「そうすれば、私は負けないから。どんなに追い詰められたって、自分を取り戻せるから。だから、だから……」	
				「私の中に、消えない思い出を刻み込んでくれ……♥　私	

				を……っ、カティナを愛してくれ……少年……っ♥」	
				対面座位再開	
				「はあああああッ♥　あッ、ああ……ッ♥　いッ、いい……ッ♥　あッ、はああッ、んんん……ッ♥」	
				「んッ♥　ふあぁんッ♥　ひびッ、くぅ……♥　はうッ♥　あッ、はッ、ふううッ♥」	
				「はぁーッ……♥　はぁーッ……♥　しょうねん、しょうねんん……♥　(ちゅっ、ちゅっ)」	
				「もっと、もっとぉ……っ♥　はッ、ああうッ♥　んッ♥　ふうぅ……ッ♥　くふッ♥　んッ、ふうぅぅ……っ♥」	
				「抱いて、くれ……っ♥　使ってくれっ♥　ふお゛ッ♥　きっ、気絶したって、失神したって、そのままでッ、構わないから……っ♥」	
				「はあ゛あああッ♥　あッ、ふああンッ♥　きくッ♥　これッ、んあ゛あッ♥　ひッ、うああ……ッ♥」	

				「だッ、だしてッ♥　ナカに、だしてえ……ッ♥　ふぐッ、んんんん――ッ……♥」	
				「う、上書き、してくれ……ッ♥　あの監獄をっ♥　あの責め苦をッ、忘れさせて、くれェ……ッ♥」	
				射精音	
				「あッ、あっ、はあぁ……っ♥　はあ―っ……♥　はあ―っ……♥　(荒い吐息4秒ほど)」	
				「ふ、ふふふ……♥　ありがとう、少年♥　私を、愛してくれて……満足、させてくれて……♥」	
				「この思い出が、幸せがあれば……私は……私たちは、負けない。どんな苦しみにも、耐えられるはずだ……♥」	
				「キミも……そうだろう？」	
				「んっふう……っ♥　ああっ、いいぞ……っ♥　何度も、何度でもぉっ♥　はあッ♥　んんっ♥　あうっ♥　あっ♥」	

				「生きて、帰ろうな……♥　ずっと、一緒に……♥　んあっ♥　はああッ♥　しょう、ねん……っ♥　少年っ♥　はっ♥　ああっ♥」	
					ピストン音と喘ぎ声でフェードアウト
			■7　目の前でシコシコ		
					ジャラジャラ、と鎖が鳴る。バチン、と金具が止まる音。
				「……大層な拘束じゃないか。疲れ果てた私が、そんなに怖いのかい……？」	
			「あは♥　そんな訳無いでしょう？　いつも裸で可哀想なお姉様に、目いっぱいのオシャレをさせてあげようと思っただけよ♥」		
					ジャラ、と鎖が鳴る。
			「おも～い首輪に、鋼鉄の鎖。頑丈な革バンドにピカピカの乳首ピアス♥　帝国最先		

			端の奴隷ファッション、とっても似合ってるわぁ♥」		
			「調教が終わったら、帝都でファッションショーをしましょうね♥　他の牝犬共と一緒に、四つん這いでテクテク歩くの♥　マゾのお姉様には堪らないでしょう？」		
					モブの笑い声
				「好き勝手に、妄想していればいい……私が、キミたちに屈服することなど、ない……」	
			「あら、なんだか調子が良さそうねぇ♥　小指サイズの少年オチンポ、そんなに気持ち良かったの？」		
				「ああ……とても良かったよ……おかげで、どんな拷問にも、耐えられそうだ……」	
			「きゃあ、かっこいー♥　聞いたぁ？　あなたのオチンポ、とても気持ち良かったんですって♥　良かったわねえ」		
				「なにを……(息を呑む)」	

					足音。これ以降、二人の声が近くに聞こえる。
				「しょう、ねん……！？　貴様ッ、なんのつもりだ……ッ！」	
					鎖がガチャガチャと鳴る
			「なんのつもりって……お姉様がカッコよく拷問に耐える姿を、見せてあげたいだけよ♥　レティ、優しいでしょう？」		
					モブの笑い声
				「く……っ！　少年、大丈夫だ。安心してくれ、私は、なんともないから……おおっ♥　な、なにを……ッ」	
			「どーお？　帝国サイズの極太オチンポよぉ♥　あくまで模型だけれど……それでも、王国の雑魚オスとは比べ物にならないでしょう？」		
				「ざ、雑魚だと……んんっ♥　ふーっ……♥　ふーっ……♥　馬鹿に、するな……こんな	

				紛い物、なんかより……くぅっ♥」	
			「こんなのよりずっと気持ちいいってぇ？　ふふ……本物サイズのオチンポ模型を味わっても、同じことを言えるのかしら、ねえ♥」		
					ディルドー挿入
				「んんん゛ッ♥　んん゛ッ♥　ふお゛おおおおぉ……ッ♥」	
			「やだ、簡単に入っちゃったぁ♥　ちょっとぉ、もう少し引き締めてくださるぅ？　へなへなの雑魚腹筋に、気合入れて、さあっ♥」		
					ムチの音
				「くおおぉッ♥　うッ、ふう゛うーーッ……！　むッ、ぐ、うぅ……ッ♥」	
			「ん、いい感触だわぁ♥　しっかり引き締めなさい……帝国の殿方に奉仕するために、一生懸命鍛えてきたんでしょう？」		

				「ふーッ♥　ふーッ♥　だ、誰がッ、おうッ♥　むッ、むむッ、ぐうゥッ♥　ふううん……ッ♥」	
			「ぷっ……なにぃ？　その必死な表情。歯を食いしばって、ぶっさいくな顔して……大切なあの子が見てるのよぉ？」		
					モブの笑い声
			「お鼻がぷっくり膨らんで、鼻水なんて垂らして……ふっ、あはは！　おもしろ～ｗ　こんな芸があるなら、道化として飼ってもいいかもねぇ♥」		
				「んッ、んん゛ん……ッ♥　ふ、ふざけ……ッ、うほお゛お゛おッ♥」	
			「こ、ら♥　力を抜かない。奥まで入っちゃうでしょう♥　ゆるゆるの、牝豚マンコなんだからさぁ♥」		
			「ここを突かれるのは、初めてかなぁ？　芋虫みたいな小さなオチンポじゃ、一番奥まで届かないもんねえ♥　あっはははは！」		

				「ふぐッおうッ♥　んんっ♥　ふお゛おお……ッ♥　かはッ♥　はあ゛あああああああッ♥」	
			「も～♥　ビチビチ仰け反って潮なんて噴いて……ダメな奴隷ねぇ♥　大切な少年に、くっさいオマンコ汁が掛かってしまうでしょう？」		
				「く……ッ」	
			「そ、れ、と、も♥　牝犬らしく、自分の匂いをこびりつけて、マーキングしているのかしらぁ？」		
				「ばッ、馬鹿を、言うな……ふお゛ああうッ♥」	
			「あははっ♥　この子は私のものだワン♥　オマンコの匂いをつけるワン♥　下品な牝畜生が考えそうなこと……卑しいにも程があるわぁ♥」		
				「ちがッ、ふゥッ♥　ちがううぅッ♥　ぐふう゛う――ッ♥　」	
			「だったら、ちゃんと我慢しなさいよ♥　だらしないオマンコから、イキ潮噴くのを止めてみなさいよぉ♥　ほらッ、ほぉらぁッ♥」		

				「お゛うッ♥　くおお゛うッ♥　うおッ、ほおおおうッ♥」	
					潮の飛ぶ音
				「うぐふうッ♥　すッ、すまない……ッ♥　すまないぃ……ッ♥　ふぐッ、おおおおうッ♥」	
			「口だけの謝罪なんてしてないでぇ、漏れ出る牝汁を止めてくださいなぁ♥　部屋中がびちょびちょなんだから、さあっ♥」		
				「くおおおおッ♥　おうッ♥　おふッ♥　ふむッ、おおおおッ♥　おッ、おおぉ……ッ♥」	
				BGV 絶句	
			「あら？　ようやくお汁が枯れたのかしら。それにしても……お水も餌もやってないのに、どこからあんなに溢れてくるんでしょう。不思議だわぁ♥」		
					モブの笑い声
			「それじゃぁ、オチンポ模型を引き抜いて、中に溜まった		

			オマンコ汁をしぼってあげようか、なぁ……ん、あれぇ？」		
			「なにこれぇ♥　ギッチギチのオマンコが、オチンポを咥えて離さないんだけどぉ？」		
					モブの笑い声
				「んん゛……ッ♥　ちが、う……♥　ちがうぅ……♥　わたッ、私はッ♥　お゛ッ、ほお゛おおうッ♥」	
			「うんしょ♥　うーんしょ♥　まだまだ抜けないわぁ♥　なんてあさましい牝の口なのかしらっ♥　ちょっと、あなたも手伝ってよぉ」		
				「な……ッ♥　しょ、少年ッ、やめてッ、やめッ、ふうっぎッ♥」	
			「そーれっ♥　そーれっ♥　いよいしょぉっ♥」		
				「ひっぎッ♥　うっぎいッ♥　ふお゛おおおーーーーッ♥」	
					潮噴き

				「あ゛っ、あッ、あああぁ……♥」	
			「あははっ♥　派手にぶちまけて……おかげで全身にマーキング完了よ♥　よかったわねぇ♥」		
				「あぁ……すま、ない……すまない、しょう、ねん……うッ、うううぅ……」	
			「ねーえ、お姉様ぁ？　これ以上、大切な人の前で恥を晒したくはないでしょう？　どうすればいいか……分かるわよねぇ？」		
				「ひゅーっ……♥　ひゅーっ……♥」	
					3秒沈黙
				「……ふ、ふふ……」	
				「恥なんて、沢山晒してきた……　あの監獄で、弱い姿も、醜い姿も、全て少年に見せてきた……その上で……私たちは、愛し合ったのさ……」	

				「だから……今ここで、どんな醜態を見せようと、あの時の想いは揺るがない！　私たちは、キミたちには想像もつかない、絆で繋がっているんだ……！」	
					3秒沈黙
			「……確かに愛し合っているみたいねぇ……この子、随分と興奮しているようだし」		
				「む……ッ」	
			「お姉様が拷問されて、アンアン喘いでる姿が良かったみたいねぇ。ちっさなオチンポを一生懸命勃起させているわぁ♥　これも絆のおかげなのかしら？」		
					モブの笑い声
				「く……っ　しょうねん……気にするな……っ♥　しょうがない、ことだ……だから……」	
			「ええ、ええ、しょうがないわよねぇ♥　どこかのエッチな牝犬が、牝汁を飛ばして、あなたを興奮させるのが悪いのよねぇ♥」		

			「で、も。そのままじゃあ辛いでしょう？　処理、してあげないとね……♥」		
				「(息をのむ)　やめろっ、それだけは……ッ」	
			「ふふ……光栄に思いなさい？　手袋越しとはいえ、このレティに世話をしてもらうなんて。一生に一度の体験なんだから……♥」		
				「うっぐっ♥　やめろッ！　触るなッ、やめろおォーーーーッ！　ほおうっ♥　うううんッ♥」	
					電気
			「あらぁ？　大きくなったわね……へーえ♥　喘ぎ声じゃなくて、悲鳴の方が興奮するんだぁ♥　じゃあもっと聞かせてあげますからねぇ♥」		
					電気。これ以降、レティによる手コキSEが続く。
				「ぐおおおッ♥　やめろッ、やめてくれえッ！　少年をッ、おおおッ♥　ううンッ♥　くうッ、はあ`あああーーっ♥」	

	喘ぎ声3		「また興奮して……ひどい子ねぇ。お姉様は、あなたを守って拷問されているのよ？　村の皆に手を出すな、私が全て拷問を受けるから、って……♥」		
				「きッ、聞くなッ♥　んぎッ♥　耳を貸すなッ、少年ッ♥　ふんっぎいッ♥」	
	喘ぎ声3		「そのせいで、あんなに弱くなってしまったのよ？　あんな細～い針一つに、ぎゃんぎゃん泣き喚くようになってしまったのよぉ♥」		
				「くッ、うぅンッ♥　まっ、負けるッ、かあッ♥　負けるものかあッ♥　ふお゛ッ、おおおンッ♥」	
	喘ぎ声3		「くす……乳首が真っ赤に腫れ上がって、破裂しそうでしょう？　あれはね……あなたのせいなのよ？　媚薬なんて、少ししか使っていないのだから」		
	喘ぎ声3		「あなたがザーメンの匂いをぷんぷんさせているから、お姉様は四六時中グツグツ発情して、あんなことになってしまったのよお♥」		

				「うっ、うそだッ♥　聞くなッ、聞くなアーーーーッ♥　がッ、あ゛あああッ♥」	
					電気
	悲鳴1		「あはは、見てよ。全身が痙攣しているでしょう？　あなたなんか一瞬で気絶してしまう、凄い威力の電気を受けているのよぉ♥」		
	悲鳴1				
	悲鳴1		「それでもお姉様は耐えていたわ。で、も……あなたに奉仕し始めてから、どんどん疲れてくたびれて……今では、ほら。この有様♥」		
				「あああ゛ーーッ♥　うあッ♥　あああああああ゛ーーーーッ♥」	
			「わあ、すごい音。お姉様の顔を見て？　とても辛そうでしょう……？　もう耐えられないの。限界なのよ」		
				「はああ゛ッ♥　ち、ちがう……ッ♥　まだ、まだぁ……♥　あうッ♥　ふいいッ♥　あああああ゛ーッ♥」	
	悲鳴2		「情けない声でしょう？　女騎士は頑丈だから大丈夫だ		

			と思った？　お姉様は強いから大丈夫だと思った？」		
	悲鳴２				
	悲鳴２		「そんなこと無いわよぉ♥　必死に我慢して、あなたの前で強がっていただけ。疲れも、痛みも、全部残ったまま、ずぅっといたぶられてきたの」		
	悲鳴２				
	悲鳴２		「分かっていたでしょう？　知っていたでしょう？　毎日毎日、痣や傷が増えて、ボロボロになっていくお姉様を、誰よりも近くで見ていたのだから……」		
	絶句		「それでも、あなたはお姉様に奉仕をさせた。オチンポをしごかせて、くわえさせて、最後には犯してくれた……」		
				「やめろっ、やめてくれぇ……少年に、そんなこと、言わないで……」	
			「礼を言うわぁ♥　あなたのおかげで、とっても強いカティナお姉様に勝てたのよ♥　本当に……あ、り、が、と♥」		
					射精音

			「あははッ♥　本当に射精するなんて、ひどい子ねえ。こんなので興奮するなんて、さ、い、て、い♥」		
				「みっ、耳を貸すな……ッ、少年ッ♥　キミはッ、強くて優しい男の子で……ッ♥　うっ、うううっ……っ！」	
				「おっ、お前はッ、お前たちは……悪魔だッ！　この世で最も、おぞましい……おッ♥　ふお゛おおッ♥」	
				「どうして、こんなことができる……おおッ♥　人の尊厳を踏みにじることが、そんなに面白いかッ！　いたいけな少年に、媚薬まで使って……」	
			「――待って。媚薬？　どういうことかしら？」		
				「とぼけるな……ッ！　お前たちが、少年を興奮させたんだろうッ！　私に性処理をさせるために、媚薬を使って……」	
					3秒沈黙

			「あ……ははは！　あははははっw　ああ、そう、そういうことなのね。どうにもおかしいと思ったら、あなた、そんな嘘をついていたのね」		
				「な、に……？」	
			「さっきの言葉は撤回するわぁ。お姉様の言う通り、あなたは優しい子ね。でも、嘘はだめよぉ？」		
			「ちゃんと……カティナお姉ちゃんがいやらしいから、オチンポが大きくなっちゃったって、正直に言わないと」		
					1秒沈黙
				「……へ？　な、え……？」	
			「レティ、この子になにもしてないもの。そもそも、こんなのに大切な媚薬を使う訳が無いでしょう？　少しは頭を使ってよ」		
				「じゃ……じゃあ、なんでっ！　なんで、少年は……」	
			「決まってるでしょう？　この子の勃起が止まらなかった		

			のは……同じ部屋にいる淫乱が、牝の匂いをプンプンさせて男を誘惑していたから、よ」		
				「……へ？　ぇ……ぁ……(過呼吸)」	
			「あなたは悪くないわぁ♥　お姉様が傷つくから嘘をついてたのよねえ♥　えらいえらーい」		
				「う、そ……嘘だよな、少年……キミは、媚薬で……そうなんだろう……？　嘘だと言ってくれッ、少年ッ！　少年ッ！！！」	
			「大変だったでしょうねえ。お乳もお尻もムチムチの淫売が、キミを守る！　なーんて言いながら迫ってきて、くっさい匂いで誘惑してくるんだからさぁw」		
				「ああ……　あああ……っ！　うそっ、うそ……そんなの、うそ……」	
			「現実を受け入れなさい。レティは手を離しているのに……勃起、したままでしょ		

			う？　私たちじゃないの。あなたなのよ、お姉様♥」		
			「あなたのせいで、この子は皆の前で、勃起させられて、射精させられて……こんな辱めを受けているの。あなたの、いやらしい牝肉のせいで、ね」		
				「あ、あああああ……」	
			「これで分かったでしょう？いやらしい体で男を誘惑する以外に能が無い牝畜生。それがあなた、カティナ・ラグナートなのよ」		
				「うあ……あああ……あああぁ……」	
				「ごめん……！　ごめんなぁ、少年……私が、弱くて、いやらしいばっかりに、こんな……こんなぁ……」	
			「少年、じゃあないでしょう？芋虫チンポの雑魚オスだけれど……あなたより遥かに格上の存在……殿方、なのよ？」		
			「奴隷の態度、分かるわよね？」		

				「うううううぅ……ッ！」	
					3秒沈黙
				「(息を吸い込む)……すっ、すみまっ、せんでしたあっ♥」	
				「淫売の癖に、牝畜生なのにッ、騎士ぶってごめんなさいっ！　お姉さんぶって、ごめんなさいッ！」	
					モブの笑い声
				「キミは……ッ、いえ、あなたはッ！　私よりも遥かに強くて、素晴らしい人なのにッ！　殿方なのにッ！」	
				「私は勘違いして、守らなきゃなんて思ってぇッ！　くッ、くっさい体で、あなたを誘惑してしまってぇ、申し訳、ありませんでしたあっ」	
			「口だけの謝罪なんて意味がないわ。行動で示してくれるのよねぇ」		
				「う、うう……っ！　分かって、ます……！　これからは、奴隷にッ、なりますうッ♥	

				騎士失格のカティナはッ、牝の分際を弁えて生きていきますッ、くおッ」	
					ムチの音
			「馬鹿言わないで。奴隷としても出来損ないでしょう？まだまだしつけが必要、そうよねぇ♥」		
				「うッ、うううぅッ♥　はい……ッ！　はいッ、そうですッ！仰る、通りですうっ♥」	
				「出来損ないの女騎士をぉッ♥　役立たずの牝豚をぉッ♥しつけてッ、いたぶってッ♥立派な牝奴隷にして、くださいィーーッ♥」	
					ムチの音
				「はうッ♥　うひぃッ♥　ひいィーーッ♥　ふおおおうぅっ♥」	
			「自分勝手に喘がない！鞭を打って頂いたら、まずは、ありがとうございます、でしょ！」		

				「はッ、はひッ♥　ひいいッ♥　ありがとうございますッ、ありがとう、ございますううッ♥」	
			モブの笑い声		
			「ふふふ……あ、見てぇ♥　この子、また勃起してきたわぁ♥　良かったわねぇ♥」		
				「うっくうっ♥　は、はいっ♥　ふおおッ♥　興奮、して頂いて……ッ、ありがとう、ございます……ッ♥」	
				「あなたの、おかげですっ♥　あなたが、教えてくれたんです……っ！　本当は、オチンポ、とても美味しくて……っ、くわえるのも手で扱くのも、胸が踊って……！」	
				「私が、本当は、薄汚い牝豚でっ♥　奴隷になる為に、生まれてきたんだって……！　あなた様が、私に教えてくださったんですぅ……っ♥」	
				「だから……どうか、どうか……ふおおうッ♥」	
				「この私に……ムチを、恵んでくださいませぇっ♥　無様な私を、騎士失格な私を、どう	

				か、あなたの手で、いたぶって、くださいませぇ……♥」	
			「あはははは！　マゾの欲望丸出しじゃない！　自分に正直で結構なことだわぁ♥」		
					カチャカチャ、と手錠を外される音
			「はい、どうぞ♥　よ～く狙うのよ？　真っ赤なところが一番キクから、しっかり叩いてあげなさい」		
				「ふぅーっ♥　ふぅーっ……♥」	
			「やりたくない？　大好きなお姉様の最後のおねだりなのに？　これからの人生、もう誰にもお願いを聞いてもらえなくなるのに？」		
			「レティはどちらでも構わないわ。全てはあなたが決めること……さあ、どうするのかしら……？」		
					5秒沈黙。その後ムチの音
				「ふおおおう゛ッ♥　キタッ、キタアアッ♥　ありがとうッ、あり	

				がとう、ございますぅッ♥　もっとッ、もっとおおおおッ♥」	
			「くくくッ、あはははははッ♥　ははははははッ」		
				「うおぅッ♥　キクッ♥　オマンコキクッ♥　はあ゛あーーッ♥　ありがとッ、ありがとうございますうーーッ♥」	
	ムチの音			「お゛ッひいぃーーッ♥　きもちイ゛ッ♥　きもちい゛いーーッ♥　ふぎゃッ♥　ああッ♥」	
	ムチの音				
	ムチの音			「奴隷ッ、奴隷にしてッ♥　してえーーッ♥　ふぐッおおうッ♥　おお゛ッ、お゛おおおーーーーッ♥」	
			トラック8		
					ガチャ、と檻が開く音。

			「久しぶりねぇ。レティよぉ♥昔、シコシコしてあげたでしょ？」		
			「処刑？　違うわよ。死体を片付けるのも大変だから、あんまりしないことにしないの」		
			「だから、あなたは釈放よ♥おめでと～♥」		
			「ねーえ、カティナ、覚えてる？　あなたが大好きだった女騎士」		
			「伝言、預かってきたわ。こんなの伝える義理は無いんだけど……中身があんまり面白いから、来ちゃった♥感謝してよね？」		
				「お元気でしょうか。ようやく釈放されると聞きました。私もたくさん躾けて頂いて、ようやく出荷が決まりました」	
				「帝国の大貴族様の元で、馬車馬と性奴隷を兼ねた奴隷として、迎えられるそうです」	
				「レティシア様に受けた調教を忘れず、牝奴隷として、身	

				を尽くして奉仕に励もうと思います」	
				「ですが……もしも。もしもあなたが、今もあの檻での約束を覚えておられるのでしたら……いつか、いつかご主人様として、私を買い取ってください」	
				「カティナは、いつまでも牝奴隷として、あなたをお待ちしております」	
			「ぷっ、ははははっ♥　健気よねぇw　あそこに買い取られた奴隷って一年も持たないのよぉw」		
			「元女騎士の牝奴隷を使い潰しては新しい奴隷を仕入れてくださる方でね、この間なんて……」		
			「あれ？　なにそれ？　久しぶりに大好きな人の声聞いたから、勃起しちゃった？　あは♥　きもちわる～」		
			「一人でしなさい。もう、あなたのそばには、頼れるお姉さんなんていないんだから、さ……♥」		

					ガコッ、と扉が開く音。
			「それじゃ、お勤めご苦労様♥　帰るところなんてもう無くなってるけど……元気でね♥　あはははははッ♥　じゃあ～ね～♥」		
					ガチャン、と扉が閉まる音。